

喜多方市 農業委員会だより

第20号

令和5年3月

編集発行

喜多方市

農業委員会

☎ 0241 (24) 5255



あきらめないで挑戦しよう

夢がいっぱい 豊かっ子



豊川小学校
佐々木 豊 校長

農業科の
活動を通して

豊川小学校は全校生111名です。今年度も3名の熱心な農業科支援員の皆様の協力を得て、全学年で農業科の活動に取り組みました。1年から4年は畑で野菜作りを、5・6年は田んぼで米作りを行いました。野菜作りを行った畑は、学校から徒歩3分ほどの場所であり、近くて便利です。子ども達が栽培に取り組んだ野菜は次の通りです。

1・2年 サツマイモ（紅はるか・紅あづま）

3年 大豆（秘伝）

4年 大豆（秘伝）ジャガイモ（十勝こがね）ダイコン（三太郎）

まず初めに畑に各学年の畝を作りました。トラクターで耕し、畝を作る作業は地域の方が行ってくださいました。子どもの手で行うには大変な作業なので助かりました。マルチかけ、種まきや苗植え、水やり、雑草取り、収穫などの作業は、農業科支援員の方のアドバイスを受けながら子ども達が行いました。収穫した野菜は、収穫祭として、「茶巾絞り」（1・2年）、「ずんだ団子」（3年）、「カレーライス」（4年）にし、農業科支援員さんといっしょに味わいました。

5・6年が米作りを行った田んぼは、学校から徒歩5分ほどの場所にあります。本校の米作りの特色は、すべての作業を子ども達が体験することです。種もみまき、ハウスでの育苗、田おこし、肥料まき、田植え、除草、稲刈り、脱穀と、他校では行っていない作業にも取り組んでいます。また、今年度は米作りについての学習会も行い、子ども達の疑問に、農業科支援員さんが、専門的な知識をもとに答えてくださいました。収穫したお米は、おにぎりにして農業科支援員さんと一緒に食べました。

なお、卒業する6年生には、小学校での農業科の取組をたたえ、農業科支援員さんから「農業科修了証」が毎年手渡されています。

農業科に取り組むことにより、子ども達は、友達と協力する体験、心を込めて育てる体験、つらくてもやり通す体験、ご指導や収穫に感謝する体験など、多くの体験と学びを得ることができます。農業科の活動は、豊かな心や社会性の育成を行う重要な体験の場となっています。

耕作放棄地の再生

「耕作放棄地を人が集まる畑へ」
「人が集まることで農地が守られていく」

喜多方市の街を見下ろす景色のよいアスパラ畑。以前は耕作放棄地でした。父親が耕作放棄地の再生に向けた整備を行っていました。再生された畑の使い手がいないという現状を見て、再生農地で農業を行う会社を平成21年に設立しました。

これまで会津地方や浜通りを中心に5年以上使われていない約170haの耕作放棄地を再生し農地によりがえらせ、このうち、地元の約20haを自社で借り受け、ソバやアスパラなどを作付けし、首都圏などの飲食店に納めています。

「耕作放棄地を人が集まる畑へ」
「人が集まることで農地が守られていく」
をコンセプトに、これまで、首都圏など



大型機械による除草作業

(株)エガワコントラクター

代表取締役 江川 正道

第8回ふくしま経済・産業・ものづくり賞（ふくしま産業賞）

特別賞 受賞

から約300人が農業体験等に参加し、様々な交流や意見交換を通して農地の現状や農業の魅力について理解を深めるなど、交流人口の増加につなげています。

また、アスパラ収穫体験後の地元温泉宿泊など、異業種との連携を進めることにより地域経済の活性化、賑わい創出に寄与しています。

「耕作放棄地は、条件の悪い中山間地に点在しており、進入するための農道の再整備が大変であることや、再生後の農地の地力回復に苦労しているが、再生農地の利用者拡大を模索しながら、引き続き、耕作放棄地の解消に取り組んでいきたい」と抱負を語っていました。



土壌改良と整地作業

喜多方市農業委員会が
優良農業委員会表彰を受賞

一般社団法人福島県農業会議が主催する令和4年度福島県下農業委員会大会が、11月10日福島市飯坂町の「パルセイイざか」で開かれ、県内の農業委員や農地利用最適化推進委員など約500人が出席した。本市農業委員会からは、京野会長や齋藤会長職務代理者を含め、各委員会の委員長・副委員長、事務局職員の12名が出席した。

冒頭で、鈴木理県農業会議代表理事会長が主催者挨拶し、福島県の井出孝利副知事とJA福島五連の数又清市副会長が来賓祝辞を述べた。

各種表彰のうち優良農業委員会表彰では、京野会長と齋藤会長職務代理者が壇上に進み出て表彰状と記念品を受け取った。同大会で優良農業委員会表彰を受けたのは、平成元年度以来2度目になる。

また、受賞者代表謝辞では、京野会長が「これまで展開してきた農地利用最適化推進活動が評価され大変光栄である。今後とも取り組みを一層強化していく」と述べた。

引き続き、弘前大学の平井太郎教授が「新しい農業・農村振興の形と農業委員会に期待すること」と題し、青森県を始めとする全国の事例を紹介しながら、「今後、農業委員会には、現場の夢を引き出す形にする伴走支援が求められていることをしっかりと認識し、意味のある



京野会長、齋藤職務代理者が登壇

目標地図・地域計画策定に向けて地域との話し合いを進めてほしい」と話した。次に、本県農業・農村の発展と持続可能な農業構造の確立を求める「本県農業の発展に関する要望書」の内容を事務局が読み上げ、12月1日に国会内で本県選出国會議員に対して要望活動が行われた。最後に、日常活動の強化と活動記録の徹底や話し合いによる農地利用最適化の推進、情報提供活動の強化の3項目を掲げた農業委員会活動強化に関する申し合わせを決議した。

(高野進 農業委員)

地区だより

高郷町

電気柵の効果と検証（鳥獣被害対策）

近年、農作物に被害をもたらす野生動物（クマ・イノシシ・サル・シカなど）が、山から里へ活動範囲を広げてきており、農家にとって大きな悩みとなっている。その原因はいくつかあるが、農村の急激な人口減少と高齢化に伴う農林業離れにより、手入れのされない山林や不耕作地の増大が一つの要因であるのは確かです。

野生動物が容易に身を隠すことができる耕作放棄地等の発生が、民家の近くまでそれら呼び寄せて農作物被害を拡大させてしまう。野生動物と共存できる自然豊かな農村の姿は理想であるが、手間暇かけて育てた農作物の収穫が皆無となる被害が発生していることも現実です。

高郷地区においては、鳥獣被害対策の一つの手段として、行政の補助を受けながら、令和2年より本格的な電気柵の設置が進められている。現在まで電気柵を設置した農地については、農作物の鳥獣被害が激減しその効果は高いことが確認されていることから、年々設置面積が増大しています。

今後の対策として、次のことが望まれるところです。



高郷町地割地区での電気柵検証風景

- ①耕作放棄地を発生させない。
- ②電気柵の効果を最大限に活かすため、地域ぐるみでの取り組み。
- ③電気柵設置に伴う経費負担軽減のための継続的な支援。

（横山 文弘 推進委員）

京野会長から遠藤市長へ
意見書を提出

令和4年11月7日、「令和4年度喜多方市農地等利用最適化推進施策の改善に関する意見書」を、京野会長から遠藤市長に提出されました。

この意見書は、農業委員会等に関する法律の規定に基づき提出するもので、地域の農業者が抱える様々な課題や要望を踏まえ取りまとめたものです。

なお、市長より12月28日付で回答をいただいたところです。

①担い手への農地利用集積・集約化

・地域農業の安定化を図るため担い手の育成・確保、集落営農の組織化及び農業経営の法人化への支援を強力に推進すること。

・令和4年5月に農業経営基盤強化促進法の改正による地域計画策定の法定化に伴い、策定に向けた組織体制の構築及び予算の確保を講じること。

②遊休農地の発生防止と解消

・県が行う遊休農地等再生対策支援事業においては、取組者の負担軽減を図り生産意欲の向上につながるよう補助率（1/2）の拡充を行うよう県に働きかけること。

③新規参入の促進

・高齢者や担い手不足などの地域課題

を解決する新規就農者の就農意欲の喚起を図り、地域農業を支える新たな農業者の育成・確保を推進すること



遠藤市長へ意見書を提出

④昨年8月3日の豪雨災害による農地・農業用施設の早期復旧

・令和5年産農作物の作付けに向け被害を受けた農地及び農業用施設の早期復旧を講じること。

・国の災害復旧事業より除外される農地及び農業用施設の小規模災害に対する復旧については、被災農業者が自ら行う復旧工事に対する補助金の交付又は原材料の支給により負担軽減に努めること。

・農地及び農業施設災害で、今春の作付けまでに完成が見込めない被災箇所については、仮設工事等による仮復旧を行うなど令和5年産作付けに配慮した復旧を行うこと。

